ほとけを拝む歌　一首

芥なすわが心かもぼんのうに
みちみてるらし　おのづから
生類の身のたかふりて　名聞を
恋ふ　そのおもひあさましければ
尽未来際堕地獄と　むねさへ
ふたぎくさぐさの悩みもしげく
しきりなき　愁ひにしづみなげかへば
いつくしみつゝ悲しみのまなぶた垂らし
みほとけは泣きておはしき
寂光の浄土は希はねうつつ身の
きたなき吾れよ　しかすがにほとりなき
慈悲と聞きしゆへ　そのみほとけの
おん前に　もろの掌あはせぬか伏して
心もしぬにおろがめば　煩悩即菩提心
みほとけにいだかれてあるこの身こそ
尊きものよ　みひかりに照らされてある

本多善英

このいのち尊きものとしぬばれて　玉き
はる命のかぎり身のきはみ　時なく
日なくところなく
南無阿弥陀仏とおろかみまつる

反歌　二首

いつくしみ　かなしみ　われを
おもふゆへ　そのみほとけを
おろかみまつる

うつゝみのなやみつきねど
みひかりに　てらされてある
人はたふとき

（釈超空に師事した悲の詩人の晩年の讃歌である。作者は昭和四十六年一月に往生されている。編集部）